

# 終章

## インドの経験——もう一つの「野麦峠」



忘れ去られた農民(南インド ケープコモリンの農村)

フィールドワークの間、いつも携行していた一冊の文庫本がある。それは山本茂実著『あゝ野麦峠 ある製糸工女哀史』（角川文庫昭和五五年二版）。シバカシ村の子ども達を、明治期「糸くり工女」の史実と重ね合わせるようにしながら幾たびとなく読みかえた。現代インド、シバカシ村の「マッチ工女」と日本の明治期飛驒の幼い子ども達には歴史をこえた共通の姿がある。いわゆる「日本の経験」がもつ今日的意味である。明治というひとつの時代状況のもとに「殖産興業」の舞台に登場した「工女」には二つの顔があったと思う。

一つは、家計の窮状を救い、村の経済に活力をもたらした、という彼女達の自負にあふれた「勝者」の顔である。著者山本茂実は聞き取り調査の方法を使い、実に多くの元工女たちの回顧や証言を引き出している。二つは、工女哀史ゆえの過酷な運命を強いられた「犠牲者」としての顔がある。作品の表題「あゝ野麦峠」の頂上に立ち、「ああ、飛驒が見える……」、と小さくつぶやきながら死んでいった少女、「みね」という名の製糸工女はまさに、「犠牲者」の顔である。二つの顔を持つ「工女」とは、ある歴史状況のなかで生まれた用語であり、強烈な社会性と文化的含意をおびた概念と思う。

私はこの「日本の経験」を現代インドの児童労働の主役、女児達に重ね合わせ、シバカシの「マッチ工女」、「花火工女」、ジャイプルの「カーペット織物工女」なる用語を使うこと

にした。強烈な現実を直視するときおのずから、概念や用語のもつ文化的バイアスに敏感になる。ところで、シバカシ村の現実に立ちすくみ、感情の高ぶりを抑え、そして、幼い「マッチ工女」のすすけた顔や、傷ついた指先の動きを目で追うたびに、私は明治期飛驒の哀史のなかに救いを求める思いがあつた。「糸ひき工女」と「マッチ工女」は、わたくしのなかでは同時代性を持つ、同じ一つの「顔」と映つたといつても過言ではない。「糸ひき工女」の哀史は一つには、家計レベルでの、「貧困脱出の経路」の可能性、二つには「産業・技術の選択」と「不就学児童労働」の関連性を吟味する必要があることを示唆している。

第一の問題。工女たちが稼いだした貨幣所得が家計を助け、田畑などの土地資産を増し、次第に農家所得を増やしていくという貧困脱出の経路についてである。当該記録はこのように記述している。

「現金収入の少なかった明治という時代、ましてや山国の飛驒では春の蒔きつけ、秋の収穫がすむと、くちべらしに信州へ糸ひきにでるのがそのころのならわしで、だれもふしぎにも不満にも思う者はなかった。」（二四ページ）

「それが明治中頃になると、くちべらしから大規模な『糸ひき稼ぎ』<sup>かせ</sup>に変わり、そして野麦峠を越えて大みそかに持ちかえる糸ひきの金が、飛驒ではなくてはならない大事な財

源になつた。」（二四ページ）

著者山本茂実の聞き取り証言が続く。

「工女が野麦峠を越えて持ち込んでくる金は一軒の水呑百姓一年の収入よりも多いこともあり、彼らにとつてそれは大事な農家の財源だつた。……『首をつろうか、野麦をこすか』飛驒の貧乏人の生きる道はこれよりなかつた。それを救つたのが飛驒の工女である。土地を買い戻した工女の話は村の美談だつた。」（三三〇ページ）

今は「工女」という用語は死語となつてゐる。歴史的含意にみちた用語に過ぎない。しかし、わが国のたどつた歴史的経験をこの含意を含めて、今日のインドに重ね合わすところのような異同がみられるのか。これが第一の事例「シバカシ村のマツチ工女」が扱う問いの一つである。

二つは産業振興、工業化のための技術選択に関わる問題である。明治の初め、日本の産業革命を支えた製糸産業は、「糸くり工女」の汗と血の犠牲の上に成り立つた。そして唯一の「外貨稼ぎ」となつた。よく知れる「国立富岡製糸所（明治五年操業開始）」を初め、十数工場がフランスやイタリアの設備や技術を導入、華々しく創業を開始していた。一方、信州（現長野市）と平野村（現岡谷市）では「いち早く富岡に模した洋式工場の創設」を計画

し、行動に移した企業家たちがいた。少ない設備資金とすぐれた「糸くり」の技を結合した純国産技術の開発があった。当時、最新鋭のフランス式機械技術を密かに探るために、「十五人の伝習女子を富岡に送り込むと共に、富岡工場をつぶさに視察、男の伝習生……を富岡にやり、雑役に服させながら主に設備面を研究させ、その日から二年後には驚くなくれ富岡製糸に模した『フランス式五十人繰糸場』<sup>そうしじょう</sup>を村の大工や旧松代藩の鉄砲鍛冶<sup>かじ</sup>を指揮して純国産で作り、明治八年八月には創業を開始」（同四三ページ）と、記されている。

先進技術の模倣・改良のプロセスとは今で言う「リバース・エンジニアリング」（Reverse Engineering 分解工学）を意味する。そして、当時の資源賦存に適した、いわゆる「適正技術」（Appropriate Technology）を誕生させたのである。さらに革新的な「糸くり」技術、「諏訪製糸型」が開発され、平野村は日本の産業革命のメッカとなった。こうして諏訪湖畔一帯に製糸業の集積が急ピッチに進み、製糸の出荷高と海外輸出量は年を追うごとに増加、「糸ひき工女」への労働需要はますます高まり、飛騨の村々から若い娘の姿が消えたという。じつに多くの「不就学児童労働」が「野麦峠」を越え、拡大する「都市・工業の世界」に吸収されていったのである。この史実は産業と技術の選択、そして「不就学児童労働」の解消という、一つの工業化過程の経験を示すものである。

シバカシマッチ産業と技術選択、「マッチ工女」の事例、また、「砂漠の児童労働」の事例はなにを含意しているだろうか。四つの事例に代表される「不就学児童労働」の問題に立ちあがるインド各地の「野麦峠」はあまりにも険しく、道筋の見えない峠道である。スラムや都会の路上に生活する経済難民にもまた、ハウラー・ブリッジという「札所」がある。カルカッタの歴史のなかに築かれた心理的な「野麦峠」の険しい道がある。そして、西ガーツ山脈の山並みに立ちあがる、いくつかの難所がある。明治の工女たちは厳寒の山道を凍え、血まみれの足で乗り越えた。インドの子ども達にも同じ試練が待ち受けている。全土に沈殿するかのように生き、そして働く子ども達はいろいろな「野麦峠」を乗り越えなければならぬ。子ども達の越えるべきインドの「野麦峠」は貧困という経済の峠だけではない。社会の差別・偏見という根深い慣習的峠道こそ最大の難所である。ITと先進的頭脳の町バンガロールと不就学児童の村シバカシの間は「教育の二重性」によって遮断されている。そこには「教育の貧困」により生まれた見えない関所が存在する。これを取りのぞくのは、V・S・ナイポールのいう小さな反乱にとって最大の難事業である。それを実現する有効な方策はいまだ案出されていない。峠道は険しいままである。

経済と市場の枠だけで果たして児童労働の本質とその課題にせまることができらう

か。独立後、半世紀以上を経過した、いわゆる「インドの経験」は教育と社会の二重性や、その根底にある頑強で、硬直した制度・慣習の克服こそ経済・社会発展のために乗り越えなければならぬ最大の課題であることを教えていると思う。

インド政府は独立直後に「子どもの教育をうける権利」を実現し「児童労働を過去の歴史」とすることを国家目標として宣言した。そして独立から六十余年すぎた二〇〇八年に同内容の宣言を再び発表した。わたくしは、そこで再確認された意思と行動を見守ってきた。わが国ではすでに「工女」や「不就学児童労働」の用語が死語となっている。インドの大地でも Child Labor, Working Children, Bonded Labor などは Slavery などの用語が死語になる時代がおとずれるだろう。本書が描いた、インド児童労働の地が一日も早く過去の歴史となることを願ってやまない。

